

『結婚しない、できない私』

監督：シェシュ・シャラム、ヒラ・メダリア

撮影：シェン・ミ、ファン・ジエン

2019年／中国／84分



配信サイト

アジアンドキュメンタリーズで配信

社会を旅する シネマ

きっともっと 近くなる
きっともっと 知りたくなる

始まりは中国・北京の結婚相談所。「学歴は高く、女性を尊重してくれる人じゃないと無理。家事も分担してくれる人じゃないと困る」、「本当に結婚する気はあるの？注文をつけすぎ。もっと譲歩しないと」。日本でもありふれていそうな会話がくり広げられている。依頼主は34歳の Qui。地方出身、5人姉妹で唯一大学へ進学し、北京で弁護士として働く Qui はこれまで家族の自慢だった。しかし30代でも結婚しないため、今では実家に帰ると親や姉たちから袋叩きに遭う。「一刻も早く片付けてくれ」「恥をかくのは私たち」「(このままずっと独身だと) どんなに惨めな人生か」などと非難の嵐。「モテやしないのに高望みして」と貶めるような言葉や「大学になんか行かせるから」と教育とキャリアを否定するような言葉まで飛び出す。

北京でバリバリ働く Qui の友人の中には、家族から同じようにプレッシャーをかけられても「力づくで黙らせる」と強気な女性もいるが、Qui はそれでも家族が大好きなのだろう。チャンスがありそうなところへ通い続ける。心をすり減らしながら、一対一のお見合いから大人数のマッチングパーティー、路上で親が子どもたちのプロフィールを見せ合う婚活の路上マーケットまで…。

中国ではかつてのひとりっ子政策の影響で、結婚適齢期の年代の男性が女性よりも3千万人も多いという。つまり女性のほうが人数で考えれば結婚において優位にある。一方、女性の高学歴化や社

「余りもの」とされる 中国社会の独身女性たち

アーヤ藍

会進出に伴い、女性の結婚条件も厳しくなっている。だが Qui お見合いをした男性が「家庭内の決定権は僕が50%超じゃないと」と堂々と言い放つように、男性側の結婚観や家族観は旧態依然としたものだ。また、親世代や地方には「結婚しない」「子どもをもたない」という選択肢自体がなく、女性たちにかかるプレッシャーは今も強い。

本作では Qui のほかに2人、結婚と家族の壁に直面している女性が登場する。公共ラジオ局に勤める28歳の Xu は、条件がいい恋人候補をいくら並べても、親が何かと「欠陥」を指摘して否定されることに、ついに限界を感じ始めている。大学の助教を務める36歳の Gai は、彼氏が年下であることに対する周囲の厳しい目を感じている。また自身は子どもは望んでいないが、相手とその家族に「譲歩」することに…。

彼女たちに覆い被さるプレッシャーの背景には政府やメディアの影響もある。政府が独身女性を揶揄するような漫画を発信していたり、メディアが20代後半以降の独身女性を「剩女(余りもの女性)」と呼んでいたりするのだ。そうしたプレッシャーを Qui は「てん足されているよう」と表現するが、女性たちが結婚しないのは「女性たちのせい」なのだろうか。女性が自分の足でキャリアや人生の道をのびのび歩めるような結婚を求めることは「求めすぎ」だろうか。



アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題に関わる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

